

法士会報

発行所
 〒184-8584
 東京都小金井市梶野町3-7-2
 TEL・FAX (042) 387-6385
 法政大学デザイン工学部
 都市環境デザイン工学科同窓会
 発行人 梅園輝彦
 編集人 会報編集委員会

(仮称) 理系学部同窓会および法士会のこれから

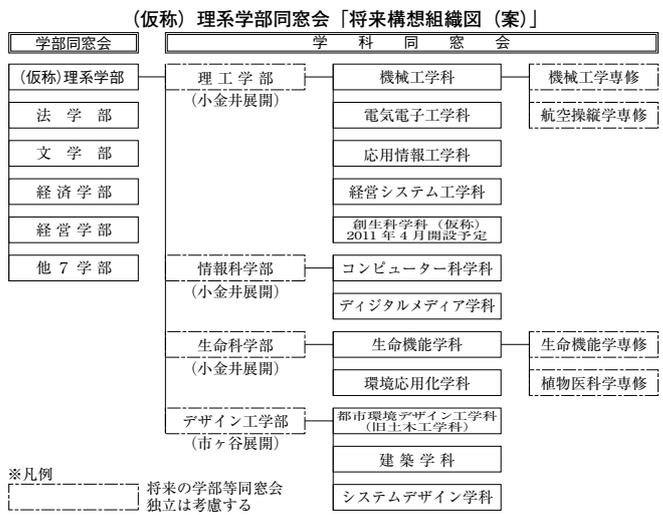
法士会 (都市環境デザイン工学科同窓会) 会長 梅園輝彦



土木同窓会創立50周年記念大会は、同窓生・恩師・現教官など多くの関係者による温かいご支援により、昨年(2009年)11月23日新宿京王プラザホテルにて無事終えることが出来ました。記念大会の同窓会近況説明の場において、「2004年度から土木工学科の名称は変更されているが、同窓会名称は引き続き『法士会』を用い改名しないこと。そして大学事務局などへの登録は「都市環境デザイン工学科同窓会」とすること」が報告され、出席者全員から賛成を頂きました。法士会事務局は記念大会準備期間において、半世紀に亘る卒業生5,350名の名簿更新(約1/3)をおこない、そして本年春学部を卒業した87名を同窓会51期生として名簿に登録いたしました。

を密接にし、その発展に寄与することを目的とする」と記されています。学部が再編成された後も学科同窓会の目的を継承し、教室との協力を一層進め、卒業生同士の交流が活発になることが大事と考えます。

私達卒業生は、学生時代友人達に所属学部を紹介する際、技術立国日本の技術者を育てる「工学部」の名称に誇りを感じたものでした。次世代の工学・科学に向けた大学の発展的大改組に伴い、この工学部名称も2011年3月をもってなくなり、同年4月より法政大学の理系学部は「理工学部」「情報科学部」「生命科学部」、そして「デザイン工学部」(2007年4月独立)の4学部体制となります。また、学部改組と共に学科についても、技術の変革を先取りすべく新しい学科の誕生や、名称の変更が行われています。



一方、工学部同窓会においては、学部、学科の再編に準拠した同窓会組織の研究・検討を進めるため、正副会長、事務局長、各学科事務局、各学科同窓会長、歴代会長から若干名が参加する「将来構想検討委員会」を2007年1月に立ち上げました。委員会では2011年春に間に合うよう、活動の中心を学科同窓会とした(仮称)理系学部同窓会「将来構想組織図(案)」の具現化が検討されています。

創立80周年、100周年に向けてスタートした法士会の活動について私の所見の一端を述べます。国土基盤整備を担当する我々土木技術者は仕事に対する目的意識に迷い、そして国民を代表する政府の一部がこれまでの国土整備手法を厳しく指弾することに戸惑いを感じているかと思います。しかし、この命題を解きほぐく技術と経験を持つ我々には、安全安心な社会構築を堅持するため効率的な国土基盤整備の方策を検討することが社会から求められています。この命題について大学と同窓会が論じ合い、その結果を社会実験に移し、実験過程や成果について国民から審査を頂くと言う、**民+学**→**官、産**の新たな流れを追い求める活動が進むことを期待します。

2010年7月吉日

『法士会』会則3条目的に、「本会は、会員相互の親睦を図り、会員と法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科との関係

「外濠清掃活動」の報告

土木同窓会では、さる5月22日(土)に外濠清掃活動を実施しました。参加者は、都市環境デザイン工学科の教員および学生を含めて計81名でした。当日は天候に恵まれ、4班編成にて、市ヶ谷・飯田橋間の外濠道路、外濠公園等の道路清掃を実施しました。清掃活動後は、市ヶ谷田町校舎での昼食をとり、希望職種ごとに分かれて卒業生と学生との懇談をおこないました。特に就職難の状況であることを反映してか、学生から活発に質疑が交わされていたのが印象的でした。ご協力いただいた方々に紙面を借りて深謝します。



地域や学生の手助けとして、こうした取り組みを定着させてゆきたいと考えています。
 三村 卓 (1994年卒)

◆参加者の声

人と人との繋がりが希薄になる昨今、OBと現役学生によるこのような取組みは互いに刺激されることも多く、地域や社会に目を向ける良い機会だと思います。2回目の今回は前回より運営もスムーズになり、アットホームな談笑ができました。次回は、もっと多くのOBの方が参加されることを願っています。
 村岡純生 (1982年卒)

「デザイン工学部の展望」 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科主任 高見公雄 教授

1. 主任を仰せつかって

法士会のみなさまこんにちは。昨年は新任教員として前号（第11号）に書かせて頂いた私が、今回は主任からの話、ということで紙面にお邪魔します。少し不思議な気もしますが、よろしくお願ひいたします。着任初年度が終わろうとしている頃、それ以前より風の便的に聞こえたりもしてはいましたが、「来年度学科主任をよろしく」という教室会議の決。自分の交通費の精算方法すらあやふやな身で学科全体の運営をこなさなくてはならない、不安は通り越して、ま、開き直りの境地でした。

4月の新学期には、工学部生を含め5学年（？）分のガイダンスを行い、私より先に当学科に入っている学生にまで、あれこれと説明をしたものです。主任の重要な役割は教室会議の運営。月2回のペースでここまで8回の教室会議を開催しました。当然のことながら毎回、薄氷を踏む思いで。なかなかさばけていて良い職場だと思います。同じく月2回のペースで学部の運営委員会というものがあります。学部執行部と学科主任による会議であり、ここでデザイン工学部全体のこと、全学のことについても知識が増えていきます。また、教授会に出ているだけではよく分からない学科間の問題、たまにはそれは少し軋んだものであったりもするのですが、皆、新しい学部を創ろうと張り切っている仲間ですので、少々軋み程度はどこにでもある話でしょう。

2. 市ヶ谷田町校舎での暮らし



デザイン工学部は入学定員280名。在籍数ベースでは4学年で1,316名います。今年4月からは大学院デザイン工学研究科が設置され、大学院生も市ヶ谷田町校舎にいますから、総勢約1,500名の学生がこのこじんまりとした校舎で学びます。大学院については、周辺に賃貸ビルの床を持っていて、ゼミ室の多くはそれらビルにタコ足状態になっています。よくいえば欧米式の街なか立地のキャンパス

とも言えます。ただ、当学科の都市プランニング系と水文学系、建築学専攻がゼミ室を構える民間ビル「フォーキャスト市ヶ谷」は、市ヶ谷田町校舎から徒歩12分、市ヶ谷橋を超え、靖国通りを新宿に向かった方にあります。大学院生たちは、授業やTAの度に暑い日も、雨の日も片道12分を歩いて行き来しています。私ども教員も往復に汗だくです。

市ヶ谷田町校舎だけをとれば、明らかに設置基準に満たない校舎設備でありまして、本当に芋洗い状態です。小さな講義室に沢山机を入れ、学生達を収容します。街なか立地の一面でもあり、東京都心の床の価値を考えさせられるものでもあります。教員が昼休みに学食を利用するなど全く迷惑、と思ひ昼食は前にずらしたり、後ろにずらしたり、抜いてしまったり。楽しくもある小さな住まいの暮らしであります。

3. デ工生が揃って

完成年度を迎え、3学科とも1年から4年まで揃いました。今年はデザイン工学部として初めての卒業生を送り出す訳です。当学科ではデザイン工学部として初めての卒業研究を実施中です。国土から都市、そして都市施設そのものや都市内の小空間までを扱う都市環境デザイン工学科、都市を構成する重要な要素である建築物を扱う建築学科、プロダクトレベルのサイズの物

品、機器を対象とするシステムデザイン（SD）学科という、モノのサイズによる大中小を持つデザイン工学部。当然のことながら3学科が揃って一つのフィールドで研究や仕事をしてみたらどんな風に展開するのだろう、という興味が強くあります。もともとはそれぞれに作られた学科の集まりですから、そんな簡単に大中小の関係で密接に連携できるとは言えませんが、学部設立の趣旨、また初代学部長が提唱した「ホリスティックデザイン」の実践は中期的な目標であります。

そんな中、私の授業の一つである「公共空間デザイン」では、3学科に開いている共通科目で今年は都市環境／建築／SDの履修登録者数がほぼ2：1：1だったものですから、これは面白いと思ひ、都市環境2人、建築1人、SD1人の4人でチームを組ませ、具体的な都内の駅前地区を課題地区に与え、大中小の役割分担で計画、設計をやらせてみています。法士会OBの方々にはやや申し上げにくいのですが、当学科入学生は本来は建築希望であった者が少なからずいます。またSDはその特殊性が認められ、入学生の高いレベルを保っています。そんなことから、先程の運営委員会ではないのですが、学部内にはなんとなく当学科をそんな風に見ている雰囲気があるように思ひます。ただ、一つのフィールドを与えられ、総合的に計画する場合、都市環境デザイン工学科生がリーダーとなるべきことは明らかです。その授業では、無理を承知で当学科生を叱咤し、建築、SDの学生をリードすべく取り組むよう激励してはいるのですが。



4. 「デザイン工学部」への期待と課題

先日親しくしている埼玉大学の建設工学科の先生を訪ねたところ「デザイン工学部」の名刺を見て、たいそう関心され、「欧米ではずいぶん前からこういった流れですよ。」と言われました。国が成熟し、総人口が減少していくような環境の中、種々の政策変化で土木・都市環境デザインといった分野の役割に陰りがあるように言われますが、では日本の国土、都市は今ままで維持管理していけば良いのかというと、決してそうではないと思ひます。安全・安心の観点から必要な施設整備はなお山積し、人々が暮らすための良好な空間があるか、と言われれば、まだまだと評価されるでしょう。そんな中、大中小の大きさ（当然ですが、大が偉いわけではなく、単に大きさです）を明快に備え、それぞれにわが国をリードするような地位を築いていくことで、デザイン工学部創設の目的に近づいていくものと考えます。少々大げさな結論ではありますが、名門大学で、都心立地で、かつ国際的流れにも合致する斬新な、デザイン工学部は、趣旨に従った3学科連携を進めるといふ期待を背負っていると考えています。

法士会のみなさまにおかれましても、当学部のこのような展開に興味、期待を持っていただき、適切に叱咤激励いただくとともに、ご専門の御立場から一緒にこれを進めていけたら、と考えております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

環境問題の解決や気象災害の軽減を目指して

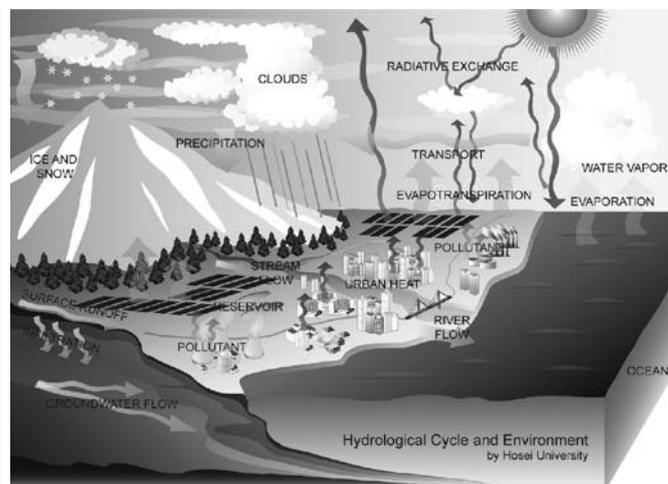
鈴木善晴 准教授

今年度より本学都市環境デザイン工学科の教員として着任いたしました鈴木と申します。先日市ヶ谷田町校舎で開催されました法土会主催の社会工学セミナーの際、一部のOB・OGの方々にはすでにご挨拶申し上げましたが、本稿では、新任教員としての自己紹介を兼ねて、我が「水文気象環境研究室」の現状とその活動内容について紹介させていただきます。

ご存知のように、本学科は今年度、小金井キャンパスから市ヶ谷キャンパスへの移設作業がほぼ完了し、腰を据えて教育・研究活動に取り組むための環境がようやく整ったばかりの状況です。特に、都市プランニング系の4研究室と、当研究室を含む環境システム系の2研究室は、今年度から、JR市ヶ谷駅すぐ近くにあるオフィスビル（フォーキャスト市ヶ谷）に入居し、ワンフロアをシェアする形で研究室の活動を始めました。市ヶ谷田町校舎から徒歩10分程度の距離にある不便さやスペース上の制約は多少あるものの、真新しい施設と各々の活動が見渡せる開放感にあふれた環境の中で、研究室の垣根を越えた交流が深まり、学生同士が互いに刺激を受け合うことで、従来以上にゼミ活動が活性化されるのではないかと期待しているところです。

当研究室には、卒業研究のゼミ生として今年度は8名の4年生が所属しています。私自身は、昨年度まで地方の国立大学（宇都宮大学）において8年ほど学生の指導に携わっておりましたが、前任校に限らず、おとなしい学生が増えつつあるという声を度々耳にする昨今の状況の中で、本学の学生には、今なお好奇心旺盛で活発な学生が多いのではないかといい印象を受けました。しかし、中にはそれが災いして、落ち着きや集中力に欠ける学生も少なからずいるようですので、教員としては、いかにして彼らの分散しがちな関心やエネルギーを研究や勉学に集中させるかが重要になってくるように思います。また、個人差が大きいことも本学学生の特徴かもしれませんので、臨機応変に試行錯誤を続けながら、学生一人一人が研究室の活動を通じて少しでも成長できるよう手助けをしていければと考えています。

現在は、すでに各学生の研究テーマが決まり、基礎的学習を中心に各々活動を行っているところですが、当研究室が扱う主な研究課題は、都市あるいは地球全体を取り巻く水循環や水資源、大気環境などに関連した諸問題で、基本的には「水文学（すいもんがく）」と呼ばれる学際性の強い学術分野が活動の土台となっています。その研究対象は多岐にわたっており、工学、農学、理学



「都市を取り巻く水循環と大気環境」
人類と自然環境の共存のためには、都市が水循環や大気環境に与える影響を把握し、適切な対策を講じることが必要です。

の専門家が集まってそれぞれの立場から様々な調査・研究が行われていますが、私自身は土木工学の出身ですので、社会基盤の整備や防災などとの関連性も念頭に置きながら、これまで、主に降水現象や大気環境に関連した研究に取り組んできました。

具体的には、「集中豪雨などの降水現象・気象現象の解明とその工学・防災への応用」、「地球温暖化や大気汚染（酸性雨）を中心とした地球環境問題の影響評価」、「水文特性や土地利用を考慮した適切な流域管理の実現」などを主要課題としてきましたが、今後は、こういった研究を継続しながら、一方で、少し現象のスケールを小さくして（あるいは地域を限定して）、本学科が教育・研究の対象とする「都市環境」との関わりが強い問題にも注力していきたいと考えています。

特に、近年は、地球温暖化の進展が懸念される中で、ゲリラ豪雨とも呼ばれる都市における局地的豪雨の増加や、中小都市河川における氾濫被害の増加が大きな社会問題となっています。その原因には、温暖化に伴う気候の亜熱帯化とともに、都市部における人工的な土地被覆の増加と裸地・緑地の減少、人工排熱の増加や高層建築物による大気の流れの変化など、都市特有の様々な問題が複雑に影響していることが指摘されています。こういった問題に対処するためには、それらの影響を定量的に評価したうえで、都市・社会構造やインフラを抜本的に見直すことが不可欠であり、これは、気候変動に対して人類がどのように適応するべきかという問題も含めて、我々土木工学に携わる者が早急に取り組むべき今後の最重要課題と言えるのではないのでしょうか。

以上、簡単に当研究室の状況を紹介させていただきましたが、今後も「地球環境問題や気象災害に立ち向かう水文気象環境研究室」として、環境問題の解決や気象災害の軽減に少しでも貢献できるよう精力的な活動を行っていきたく考えております。本学科のように、同窓会組織がしっかりしていて、活発な活動がなされていることは、教員として非常に心強いことでもあります。まだまだ至らぬ所の多い新任教員ではございますが、OB・OGの皆さまのお力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。



水文気象環境研究室のメンバー（フォーキャスト市ヶ谷にて）

ハワイ島滞在中の新体験

同窓生の皆様に、気楽に読める記事を一編ご提供します。一度ハワイ島に滞在したことのある多くの方は、溶岩ばかりの島で高い山と天文台、そしてコナコーヒーの島であるという印象を、持たれていることと思います。実は大凡その通りなのですが、今回ハワイ島に滞在して新しい発見が得られたので報告したいと思います。

今回は、2009年12月30日から2010年1月6日まで滞在了。年末の30日に出発すると、航空券が格段に安くなるということを知りました。現地について時間の無駄が無いようにと思い、東京で少しの準備をしました。30日朝10:25にKONA国際空港に到着予定なので、12:30からのゴルフの予約をして出発しました。滞在地は北部西岸のWaikoloa Beach Resort、KONA空港からレンタカーで約40分、Resortに到着後チェックイン手続きをし、車で3分位のゴルフ場へ出発、昼食のためゴルフ場レストランで特製サンドイッチをテイクアウトし、急いでゴルフスタートということでハワイ島滞在中を開始しました。まずはサンドイッチを食べながらのラウンドになりますが、コース内の至る所に岩場が牙を出しているためスコアが纏まらないという状況になります。一ラウンドが終わると夕食のことを心配したくなるような時間となるため、ゴルフバッグをゴルフ場に預け近くのABCストアに買い出しに行きます。ABCストアでは、ステーキを食べたければ適当な厚さにスライスしてもらえ、食材はなんでもそろっているので便利です。食材をホテルに持ち込み自分で調理すれば、安く好きなものを食べることができ、ベランダで綺麗なサンセットを眺めながらの夕食は何とも言えない至福の時を満喫することができます。

今回の滞在中では、ハワイ諸島で一番高いMauna Kea (4,205m)に登りました。1月1日の12時過ぎから時間をかけて頂上を目指しました。途中、火山の爆発によりハワ

イ島の多くの場所に溶岩が流れ出し、数度にわたって溶岩が重畳した結果、溶岩ばかりの島になってしまったという光景を眺めながら頂上を目指しました。この溶岩はヒロなどの南部の方へ流れたため、北部の方では被害が少なかったようである。車は4輪駆動車のミニバスで、ゆっくりとエンジンを吹かしながら登ってゆきます。標高が高くなるにつれ砂礫状の道路となり、4輪駆動車以外の車では何とも登りにくい道路状況となってゆきます。標高3,000m位のところで気圧調整と夕食と防寒対策のため小休止し、頂上登坂に向けた準備を行います。サンセット見学のための時間調整も済ませた後、頂上を目指して出発。4,205mの頂上は、風が吹き寒い。少し目眩がする。夕方6時過ぎになると太陽が沈んで行く。時間との競争のように沈んで行く。何とも言えず綺麗である(写真1)。

夜の7時頃になると当り一面真っ暗闇となる。頂上から500m程下った真っ暗な空間で、星座観察に入る。こぼれ落ちそうな星を眺め暫し堪能していると、真っ暗な夜空に月の明るさを交えてくると星が無くなる。何とも忙しい光景である。望遠鏡を通して撮影した月の表面の表情を写真2に示す。結構細かな所まで映っていると思う。

今回のハワイ島滞在中で初めて、岩場の無い緑豊かな土地があることを知りました。その場所はWaipio Valleyです。Waikoloaより車で約1時間の場所である。無愛想なナ



写真1 Mauna Kea (4,205m) 山頂からの沈みゆく夕日



写真2 Mauna Kea (4,205m) 頂上近辺で撮影した月の表面

ビ付レンタカーで19号線を北部に向かって走り、道なりに走ると北部右岸に出る。240号線と合流すると240号線に入り北上するとワイピオ渓谷に到達する。あたり一面は緑豊かな渓谷があり、ワイピオ・ベイに行くためには急勾配の坂を下るため4輪駆動車で行かないといけない場所でもある。渓谷に入ると草木の茂る世界となる。渓谷に入らなければ緑豊かな山々が連なる世界となっており、乗馬ツアーを楽しみながら野山を歩くことが出来る。ここは、岩場ばかりのハワイ島という印象を完全に払しょくしてくれる世界である。写真3は乗馬ツアーに参加し、山側よりワイピオ渓谷を映した写真である。なお、無愛想なナビであったが、大いに役立ったことを付記しておきます。

今回の滞在中では、今まで知ることの無かった場所を知ることができ、ゴルフ以外の楽しみを与えてもらいました。次回に行くときには、今なお噴火している火口を見に行きたいと考えています。

前法士会同窓会長 渡邊隆之 (68年卒)



写真 Waipio渓谷を山側より見下ろした写真

第15回社会工学セミナー報告とご案内

皆様のお陰で、本年6月16日で第15回目の社会工学セミナーを開催しました。今回は、2編の講演となりました。最初に、今年4月より専任教員として着任された鈴木善晴准教授に、「豪雨のしくみと地球温暖化の影響について」と題し、近年発生しているゲリラ豪雨の発生原因等、それに対しての最新の予測方法について講演して頂きました。

次に、本学兼任講師で卒業生の佐藤昌宏先生に、「ダイオキシン類による底質汚染の現状とその対策方法について」と題して、沿岸部で問題となっている底質汚染のメカニズム、それに対しての具体的な工事の対策方法を講演して頂きました。

2編とも今後の環境ビジネスとして注目されている分野であり、研究、予測解析手法、工法開発の方向性を示す貴重な講演でした。この講演を機会に、「環境ビジネスの

法政」という看板が掲げられれば良いと感じました。

今回の参加者は、現役の学生が50名、OBが20名という参加人数でした。徐々に参加人数も多くなり、学生の参加が多くなっています。このことは、実社会でどのような事を行っているのか、また、今後の就職について有意義な情報を得たいという気持ちの表れかと思えます。皆さんの気持ちに答えられるよう、教室と同窓会が一緒になり、今後も有意義な社会工学セミナーを開催していく必要があります。今後ともOB諸氏のご協力の程、よろしくお願い致します。

次回、第16回目の社会工学セミナーは11月後半～12月初旬に、日本国内の建設市場の縮小に対して、新聞紙上でよく目にする「社会基盤整備の輸出」について、海外の建設マネジメントおよび現場に明るく、四方山話

ができる方を講師として依頼する予定です。

講演題目として「(仮)社会基盤整備の輸出とその可能性」に開催予定しています。多くの方々の参加をお待ちしています。

蛭川愛志 (1984年卒)

編集後記

土木工学科から都市環境デザイン工学科に学科変更したのが2004年。2006年には市ヶ谷田町校舎へ場所を移し今年の春、小金井校舎で学んだ最後の4年生が卒業しました。小金井校舎は遠いところになったような気がします。法士会の打合せ等で市ヶ谷田町校舎へ行くたびに、実験棟もない教室ばかりの校舎は、私にとって少々寂しい気がします。

『コンクリートから人へ』と公共事業削減による土木事業逆風の中、集中豪雨やゲリラ雨などの被害が発生するたびに、必要なのは泥臭い『土木工学』であり国・人間を支えている基盤であると強く感じるこのごろです。

法士会報編集委員 山川宏明 (1984年卒)